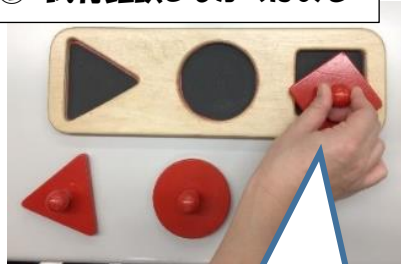




型はめパズルを通して子どもの発達をみてみよう

型はめパズルってご存知ですか？特別支援学校では、自立活動の時間などに課題としてよく使われている知育玩具です。実はこの型はめパズル、子どもの発達によって型のはめ方が変わってきます。子どもが型はめパズルに取り組んでいる様子を「どのように型にはめているか」をポイントに見てみましょう。

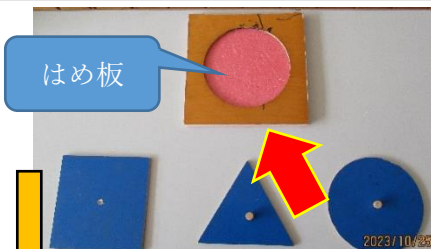
① 試行錯誤しながらはめる



こうかな？クルクル回して…
あ！はまった！

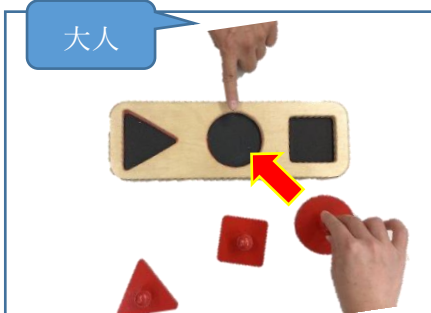
「あでもない、こうでもない…」と試行錯誤しながら型の向きを変えて型をはめている様子からは、子どもが目で見える（視覚）だけではなく、手の感覚（触覚）も頼りにしながら取り組んでいることが分かります。このことから、物を見分ける力や同じ物を理解する力が育ち始めていることが分かります。日常生活においても、いつもと同じ流れが分かるようになり、いつもと違うことがあると気持ちが落ち着かなくなることもあります。また、型はめパズルのような弁別教材（色ごとに分けたり形ごとに分けたりする教材）を介して、周囲の人からの言葉掛けを理解したり応じたりすることが、今後のやりとりの広がりにつながると言われています。

② 正解がどれかを選択してはめる



型をはめる際に試行錯誤する姿が見られなくなってくると、左の写真のように提示されたはめ板を見て、型を選んではめることができるようになります。これは、大人がはめ板を提示するまで待つ力や、提示されたはめ板の形を少しの間記憶に留める力、細かい部分を正確に見分ける力が育ってきたことが分かります。

③ 大人の指差しに対応してはめる



左の写真のように、大人が指さしたはめ板の形を見て、正解の板を選ぶ姿からは、相手の指示や意図を理解できるようになってきたことが分かります。それは、相手に合わせる力がついてきたということもできます。そのため、生活の中で自分の意に反したことがあっても、大人の言葉掛けに応じて気持ちに折り合いをつけたり、活動をスムーズに終われたりできるようになります。

子どもの見る力や、教材を介して相手に合わせる力を、型はめパズルの教材を通して育てていくことができます。同じ教材でも提示の仕方によって難易度が変わってくるので、課題に取り組んでいる姿や、日常生活の姿をよく観察して、学習を進めていきたいですね。

